

おおとり会だより

同窓会発足当時の事



同窓会おおとり会会長

牛木 琴

新世紀二〇〇一年は、一九五一年に、県内女子の高等教育をとの県民の要望から、静岡市北安東の地に女子短期大学が創設されて、丁度半世紀にあたります。

開学当初はまだ、学び舎も建築途上であり、学内は自分達で何も彼も創り出す希望に満ち溢れておりました。皆様の想い出深い、いぶし銀のお茶の花の校章も、高校時代、美術部で活躍していた被服科一回生のデザインしたものでした。卒業後、藤田先生御指導のもと、会則を作成し、同窓会を結成して、現在静岡市庁舎の建っている処にあつた、静岡県民会館で第一回総会を行いました。初代学長鈴木弘先生は日本平の丘陵に全寮制の女子教育の場を創るのを理想としていらつしやいました。そして卒業生には、卒業後も知的再生産の機会を与えたいとの事で、同窓会主催で、夏期休暇中母校の先生方に依る一週間程の夏季講習会が行われました。その開講式が同窓会の総会行事と云うことでこの会が発足致しました。先生方には記念品として、銀の食器を毎年一種類づつお贈りして、何年かで一セットとなる様に遠大な計画を致しました。校章入りのテールスプーン、ティースプーン、フォークまでは覚えておりますが……。

その後、何代かの会長の交替があり、美尾浩子さんの同窓会長の時、時代の要請により女子短大の大学昇格をとの声が高まりました。それで県への働きかけ、署名運動、県議会の傍聴等を同窓生が一丸となったのを懐かしく想い出し

ます。生き急いだ美尾さんの事はまことに悔しい、悲しいことでした。せめてあと十年生きて、美尾さんの内にある多くの問題にたち向かってほしかったと想っています。

県立大学への統廃合の話が起つた時は、確かな情報が少しも伝わらず学内外の思惑が渦巻いて、動く事を止められていたとは申しながら、渦中にあつた学生の叫びに、同窓会として何も出来なかつた事は、何とも腑甲斐ないものでした。県立大学の内に唯一残された女子大の図書館の建物に拘り、その中に同窓会の拠点を設ける事で同窓生の心の拠り処をと願つたのですが、その建物さえ無くなつてしまいました。その後、活動の拠点としての同窓会室は大学のご理解のもと、クラブ棟の中に確保していただきました。そこでメモリアルコーナーの中に『新生の礎』なるモニュメントを県立大学創立十周年記念の年に年に設置し、森元学長、内園前学長、県立大学長先生御列席で除幕式を行いました。

本年は、県立大創立十五周年の記念行事が行われるとの事、おおとり会では、理事会に計り、細やかながら資金協力を致しました。又、県立大には、はばたき基金制度があり、学生教職員の見学を行つております。おおとり会では、今年度から少し長い目で見た同窓会活動の一環として協力してゆきたいと思つております。会員の皆様にも、御賛同、ご協力いただきたく、振替用紙を同封致しますので、何卒よろしく御願ひ申し上げます。

関西支部

草薙の丘の集いのこと

英文学科(大学十回卒)

平野 幸子

草薙の丘の集いは九一年七月に京都の石清水八幡宮で小泉先生を囲み、関西在住の有志十名が会合をもつたことが始まりです。それはまさに静岡女子大学が消えてしまつた年でもありました。母校がなくなり、腑に落ちない思いと寂しさで一杯の私達は卒業生の心の拠り所となるように同窓会誌「あるばとろす」を復活させることにしました。これまでに三号から九号まで無事に発刊することができました。当初十数名のメンバーだったこの会は着実に成長し、今では関西にとどまらず、多くの卒業生のもとに「あるばとろす」が届けられています。

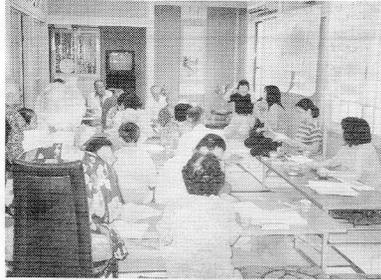
私達は毎年春に集いを催しています。昨年はからすま京都ホテルで森先生、小泉先生、原口先生、上條先生、川端先生とご一緒になごやかな雰囲気の中、楽しいひと時を過ごしました。川端先生に里山の保全についてお話をいただいた後、出席者全員が近況報告をして旧交を温めました。

私達の活動の中で忘れてはならないものとして、モニュメント建立の提案があります。結果は思わぬ方向へ流れてしまいました。モニュメントが現実のものとなったことに大きな意味があつたと思ひます。

この集いが私には仕事(病院のお年寄りのためのデイケア)に就くきっかけを与えてくれました。皆さんの活躍されている姿を見て「私もいつかきつ」という気持ちがあふくらんだのです。これからは草薙の丘の集いがますます発展し、卒業生の皆さんに何らかの形で意味あるものになればと思っています。

県立大学看護学部の現状と未来

静岡県立大学前看護学部長、平成13年度新設、大学院看護学研究科 科長 矢野正子



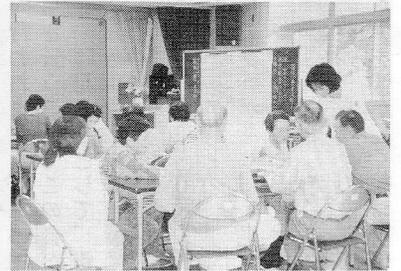
学部創設後1クール4年となり、新たな気持ちで次の課題に取り組んでいきたいと思っています。昨年に引き続き学部動きを紹介させていただきます。

看護学部は全学年がそろい、新世紀元年の四月には第一期生が社会で活動を始めます。今回は目の前にある四つの課題をとり上げます。

一 社会人・編入学試験を実施

昨年9月30日(土)に社会人・編入学試験を実施しました。

平成4年以来、全国で看護系大学が急増し、現在もその数は増えつつありますが、その間に大学改革が叫ばれ、生涯学習



の推進、入学資格を含む規制緩和が行われるようになりまし。昭和60年頃には、大学が学校教育法の第一条でない専修学校の卒業生を編入学の対象とするなどということ

全くあり得ないことでした。私は当時厚生省にいましたが、何度このことで文部省に申し入れをしたことか。しかし、答えはいつもNOでした。厚生省所管の専修学校のステイタスを上げるには、このしくみを作ることが第一の突破口でありましたから、それが今、時代の波に乗っていても簡単に、しかも当学部でそれを実施することになったことは、当り前といえれば当り前片づけられますが、世の中は変わった、の実感です。

二 大学院看護学研究科の開設認可

次に大学院の開設が去る12月21日文部大臣により認可されました。

戦後、看護の大学教育のスタートは昭和27年に高知女子大学家政学部看護学科が第一号であり、続いて翌年東京大学医学部衛生看護学科が設置され、その後は平成3年までわずか11校に留っていましたが、以降急増し、平成12年には86校になりました。それまで看護職を志す人々には上級の教育機関へ進学する道が閉ざされていました。ましてや大学院についてはさらに遅れをとりました。

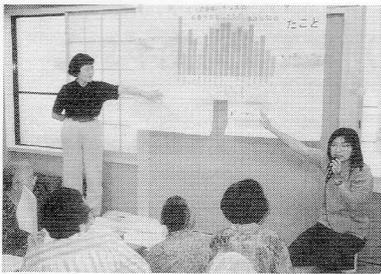
そこで当学部においては、今後の社会保

障制度の動きや保健・医療・福祉サービスの供給システムの統合化の方向などをふまえて看護職の役割や機能を重視し、それに対応していくには看護の実践と教育ならびに研究など、あらゆる領域で高度な職業化や専門化は欠かせない条件となるだろうと考え、現行の学部教育を基盤とし、また、学内他研究科との協力・連携を得て大学院を整備することにしました。研究科は二つの領域から成り、その一つは看護基礎科学領域で4専門分野、即ち①生体構造機能学、②病因・症候論、③保健・医療システム学、④看護管理学とし、他の一つは看護実践科学領域で4専門分野、即ち①地域看護学、②小児看護学、③母性看護学、④成人看護技術学としました。

将来広く静岡県下の看護関係職種のリーダーとして活躍する人材の誕生を期待します。

三 教育課程の改正

看護系大学は、大学教育としての内容とともに国家資格である保健婦・士、助産婦、看護婦・士の養成機関としての指定を受けることから、その教育内容は社会の要請や動向によって強く影響を受け、指定基準が変更されます。このことが4年間に生じたため、それ以前の基準で作られた現行カリキュラムを見直すことにしました。



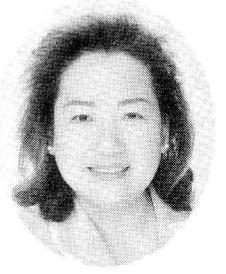
ここで目を転じて教員の動きの一部を紹介しします。

平成9年改訂では、在宅・地域など高齢社会や福祉の問題にますますシフトが置かれるようになっていきます。

四 地域住民を対象としたプロジェクト

静岡県は高齢者の平均自立期間は沖縄に次ぐ高い位置にあります。そこで静岡市を手始めに市内の比較的に中心部に近い地区と、山間部の中間にある地区について、老人大学や寿大学に通う元気な高齢者を対象にセミナーを企画しました。ここに参加されたのは、2年前からライフスタイルの面接調査に応じていた方々が含まれています。今回のセミナーの目玉は調査結果に基づくグループワークと発表でした。また、教員が「みんなの体操」や「イズノスケ音頭」のインストラクターとなり熱演したところ、今後の集りで正式科目にしたいといわれ、参加者の積極性にびっくりしました。

さいごに、最近の実践では病棟・外来・地域の「連携」とか、関係職種による学際的な「連携・協力・協働」など「チーム」が強調されるようになり、教育でもそれに留意して学生を指導しています。



「国政に送られて」

被服学科（大学五回卒）
衆議院議員 大島 令子

卒業から二十数年の様々なプロセスを経て、二〇〇〇年六月の選挙で衆議院議員として国会に送り出された。

静岡女子大学の卒業生であることを誇りに思い、こうして『おとり会だより』にご挨拶させて頂くことを光栄に思っている。

原稿の依頼をいただいた時、私の脳裏には懐かしい友や、先生のお顔が浮かび、同窓生というのは、どんなに長い空白の後でも過ぎ去った昔に戻ることができる不思議な存在であり、かけがえのない存在であるとあらためて感じている。

振り返れば、私と政治の出会いが学生時代を過ぎた清水市での公害問題であった。政治は私たちを守ってくれる。しかし、

この考えは一方で企業による大気汚染、喘息で苦しむ人を生み出し、経済発展の裏で犠牲者も生み出した。「何かおかしい」という問いから社会に対する問題意識を大きくし、これが高じて一九九一年、引越して来たばかりの愛知郡長久手町の議員に女性として初めてトップ当選した。

憲法二四条で男女平等が高らかに謳われているが実社会での女性の地位は、はるかに低い。子育ての中で体験した教育、保育、応援して下さったお年寄の方々の意見を議会に届け、全力で駆けつけた町議の八年間であった。この中で学んだ事は、人から

与えられた権利は簡単に奪われる。しかし、己が勝ち取った権利ならば自分達のものとして根づくという事である。

地盤（組織）、看板（肩書き）、カバン（お金）のない私の衆院選への挑戦は、社会の隅に追いやられていた女性たちの想いが大きなエネルギーとなり、支援の輪を広げ、無名の女性を国政に送ってくれた。本当に嬉しい。

男性社会の色濃い国会では、女性の入閣はお飾りの一〜二名程度であるが、私の属する社民党は十九名の議員のうち十名が女性であり、国会と国民が一步近づいたと実感している。少数であるがゆえに大変な面はあるが、とてもやりがいのある仕事である。

法案の審議に臨むときは、常に弱者であり少数である人に不利益があつてはならないという立場にたち、立法府である責任を果たしたいと思っている。

自分は国民の代弁者たる立場の重みを感じる一方、四八歳にして新たに「勉強」という興味と楽しさも感じながら情熱を持って日々活動している。

介護保険制度が施行された現在、県立大学に看護学部が設置された事は、広く地域に貢献できる大学として大歓迎である。

二一世紀の高齢社会を予測して、わが国で介護の問題が公的介護として制度化された一九六三年に老人福祉法が制定された。ハイスピードで高齢社会が進み、介護の問題ぬきに今の政治は語れない時代になった。

政府は、一九九〇年に老人福祉法等福祉八法を改正して福祉施策の重点を施設介護から在宅介護へと移行してきたが、ホームヘルパーも特別養護老人ホームも絶対的に不足している。

このような中ですばらしい理念・理想を掲げ制度化されたのが介護保険法である。しかし、在宅介護は本来、介護福祉の基本であるにもかかわらず、わが国の場合は、本人の配偶者や女性に過重の負担が強いられている現状であり、同じ女性として心を痛めている。

二一世紀の本格的な少子高齢社会に向かつて、誰もが長命化に伴う介護に対する不安を抱いている。

この法の施行により、基本的には市町村



9.11 東海集中豪雨で町全体が床上浸水した西枇杷島町を視察。（堤防の決壊箇所を県職員からうけとっているところです。）

都道府県および国も公費負担による介護サービスの整備・拡充に努める責任が薄くなり、民間企業のシルバーサービスが参入し、基盤整備が図られる情勢であるが、今後は市町村独自で行うべきサービスの必要性を住民に明示し「要介護者」に対し保険福祉事業について地方行政としての責任を果たすことが求められている。

そして、私たち国民一人ひとりが自分の住む地域がほんとうに安心して老後を過ごすことができるのかを考えて行動しなければいけない時期と想っている。

介護保険は、施行されて五年後の二〇〇四年に制度全体を見直すことになっている。「介護の社会化」とはいえ、現役世代に対して保険料を負担させることには法理論的に無理な面もないわけではないと思う。それだけに「負担あつて介護なし」などと一部で指摘されているような事態だけは避けなければと考えている。

スウェーデンやデンマークなどみる公費（税金）負担方式への転換も視野に入れて、制度全体を見直すべきだと思う。

介護の現場が混乱し、様々な問題が噴出する中で、私も微力ながらも皆さんが安心して暮らせる社会を創るべく努力したい。何と言っても天の半分は女性である。政治家の半分を女性が占めれば、この地球は、平和で豊かになると希望を熱くし国会と地元を往復する日々である。

最後に、同窓生の皆さんが誇りに思ってください。衆議院四八〇分の一の一人として努力することをお約束し、県立女子大学およびおとり会の皆さんへのご挨拶とさせていただきます。

介護の現場から

食物学科(大学三回卒)
宮氏和子

介護保険制度実施の約一年前「平成十一年四月」私は五年ほど勤めた在宅福祉の仕事で辞めた。介護保険制度が実施されていないければ、おそらく停年まで勤めていたであろう職場を、である。それほど、私は、この制度に対しては疑問を持っていた。高齢化社会に向け、介護をみんなで支えるという名目はいい。しかし、担い手は民間企業にまで及ぶという。食わずぎらいのところがあるかもしれないが、福祉と勘定(経営)は似合わないような気がした。在宅福祉では、お年寄りにホームヘルパーを紹介し、できないことのお手伝いをさせてもらう仕事であった。直接お年寄りと係わる現場の仕事なので、制度が実施されれば、介護保険と向き合っていかなければならない。疑問を持ったままの仕事はやりにくい。当事者でないところで介護保険を見ていこうと考えた。幸い通所施設での仕事に就く事ができ、現在に至っているが、介護保険制度というサービス事業なので、多少は制度にも関係はある。制度を毛嫌いしていてもいけないし、通所施設の利用者に還元できればと考え、ケアマネジャーの試験も受け、資格を手にするにはできた。しかしケアマネジャーの研修を受け、仕事の内容が思っていることとあまりに違い違っていたため、今のところ資格の利用は考えていない。

私の理解していたケアマネジャーの主な仕事とは、お年寄りがよりよい生活を維持

していくためのお手伝い、つまり「ケアプラン」を立て、それを実施していく事であった。が、それよりも、事務的な事が先行するようであった。実際、制度が始まる半年前から、前の職場の同僚(ケアマネジャー)は、訪問調査に走りまわり、とても忙しい思いをしたと聞いた。ケアプランを立てている時間はほとんどなく、調整に追われっぱなし、とも聞いている。当のお年寄りはどうなのだろうか？サービスの利用のたびに費用の割を負担し、この十月からは保険料も支払う(半額負担はあるが)事になり、物入りである。恩給や年金で、経済的に心配なく暮らしておられる方はいが、老齢福祉年金とわずかな預貯金で暮らしておられる方はどうであろうか？サービスを利用したくても考えてしまう方はきつというしやと思う。保険料や利用料の負担軽減策はあるにはある。が、はたして十分であるのか？

もう一つの問題点。それはお年寄りの特性である。「他人さまのお世話にはなるべくなりたくない」という思いのお年寄りは多い。介護保険でサービスを利用するには要介護認定を受けなければならぬ。訪問調査と主治医の意見書をもとに審査会が開かれ、要介護



度が決められる。この訪問調査で、ケアマネジャーにいろいろ聞かれるが、「一人でできません。別に困っている事はありません」と答え



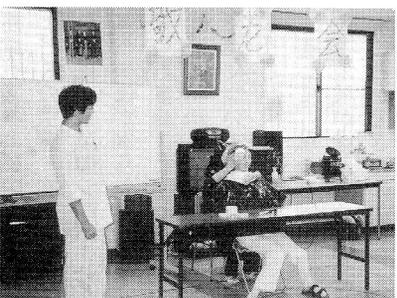
「自立」と判定されてしまいうことも多い。逆に、訪問調査の時たまたま調子があまりよくなく、初めて出会うケアマネジャーが調査にあれば、普段の様子を知ら

ないだけに介護度が実際より高く判定されることもありうる。訪問調査にあたるケアマネジャーも初対面にお年寄りの全体像はなかなか把握しにくい。何回か訪問するうちにわかってくることもあるはずなのに、一回の訪問調査をもとに、要介護度が決められてしまうのはおかしい。

問題の多い介護保険制度ではあるが、お年寄りは、それでも楽しんで、通所リハビリテーション(デイケア)に来てくれるので、今の職場は私にとってやりがいのある「場」である。今までに多くのお年寄りとの出会いがあった。その中で印象に残っているお年寄りを紹介しよう。

まがった事が大嫌いな彼女は、誰に対してもはつきりと意見を言う人であった。年寄って寝たきりとなり、自分が誰なのかわからなくなることもしばしばであった。が、彼女はまわりをなごませる力があつた。いつもにこにこ笑顔を忘れず、「ありがとう」の感謝の言葉を惜しまない。すてきなお年寄りであった。

男性が女性を介護するのは大変そう、ましてや年をとってからは体力もついていかないのでは、と誰もが考える。が二十年近



く、奥様の介護を続け、家事も完璧にこなしている人に出会った。続けられる秘訣を聞くと、それまで奥様が自分にくれた事を感謝しているので、苦なしにできると話してくれた。盲人の所にもホームヘルパーが派遣される。しかし、掃除などの家事はほとんどなく通院介助などの外出介助が主であった。が、訪問するたびに驚いた。家が整然としている。眼は見えないが、手や足の触感で汚れがわかるそうで、いつもピカピカにしておられた。デイケアにもいろいろな方がいらつしやる。九十才を過ぎても、意欲は旺盛で何にでも挑戦される方、少し物忘れがひどいが相手を思いやる気持ちや、会話の楽しさは抜群の方、スタッフを楽しませてくれる方など、様々である。ある時、通所者の一人が話しているのを聞いた。「家族だったら、こんなにはしてくれないよ」あたり前のことをしていてもそのように喜んでくださる。家族としてはつらいところであるが、私も家では同じようにはできないことがある。誰でもいつかは年をとる。生きてきたように年をとると思う。今から備えていこう。



初めての介護

被服学科 (短大五回卒)

阿部 洋子

何の前ぶれも無く突然その日は来た。晝一面の吐瀉物を一体誰が掃除するのか。八十歳の舅はしかし最後まで意識は正常だった。姑が他界するまで誠に元気だった。足腰立たず、尿を漏らし始めてからが悲劇の幕開けと言える。介護体験はいかに苛酷なものか、筆舌に尽くしがたい。

現在は、訪問看護も、デイサービスも行政はしてくれる。四年前にもあったが、世間体が悪いとか、嫁の当然の仕事として、利用させてもらえなかった。

老夫の心の中は、戦前の家父長制度や、男尊女卑の思想が大樹の様に存在している。剛腕の嫁は、老夫を抱き上げ入浴させ、車で病院に運び、車椅子に乗せて散歩させた。おむつを替え、下着を洗い、食事を手伝う。

さて、これが自分だったら?

二十年後、老人になった自分自身を考えてみよう。歩けるなら良いが、歩行困難だったら――。

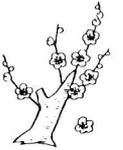
定期的な訪問看護や、デイサービスはありがたい。老人たちが集まれるケアハウスも楽しそうだ。皆で集まって、嫁や娘の悪口を言いながら笑いこけるのも悪くない。願わくば、最後まで人間らしく扱われたい。

静岡県立大学に看護学科が設置されたそうです。老齡社会になれば、仕事も多いでしょうが、誇りを持って前進してください。期待しています。

近況報告

英文学科 (大学十回卒)

久保田育子



静岡女子大学英文学科、静岡県立大学国際関係学部の英米文化コースと、助手として長い間勤めさせていた。退職後、3年前にジェンダーの研究をするために日本で唯一ジェンダー研究の拠点を持つお茶の水女子大学の大学院に入学しました。所属している開発・ジェンダー論コースでは、静岡にいたのではなかなか触れることが難しいこの学問分野の最先端の研究動向や知に触れることができ、非常に有益なことだったと思います。

大学を卒業して十八年も経ってから学生に戻る、しかも私の入学と上の子供の小学校入学が重なるというスタートとなり、夫と子供を送り出し、下の子を保育園に預けてから新幹線に飛び乗るという慌しい毎日、途中で挫折するのではないかと不安もありました。しかし、家族の応援や協力と忍耐(一)のおかげで、どうにか投げ出すことなく続けることができました。資料を詰めこんだデイバックを背負って新幹線のデッキに立ち、車窓から朝の陽光を受けて輝く谷田の丘と県立大学の校舎を見送った後は、自分が異次元の世界に向かっているような不思議な感覚になって、大好きな一瞬です。東京駅で新幹線のドアが開く時には、すっかり大学院生モードに切り替わっています。

卒業後、大学や大学院で再び勉強や研究を続ける卒業生の方も多いと聞きました。私も歩みを停滞させることなく努力を続けていきたいと思えます。

一つれいなるままだー こども病院の栄養士として

食物学科 (短大十四回卒)

青木 慧子



二千年問題に対応する為、固唾をのんで病院の局長室で新年を迎え、命を預っているという責任をまさに身を持って体験させられたあの日から一年が過ぎ、いよいよ新世紀です。私の勤める静岡県立こども病院は、静岡駅から北東約八km、四季折々野鳥が飛び交う麻機遊水池の近くにあり、ベッド数二百、全国六番目に設立と紹介予約制の子供専門病院です。私は六kmの道のりを車で通勤していますが、通りにには元気な子供達が行き交い、休日にはテーマパークで楽しむ家族連も当り前の様に見受けられます。しかしこども病院では、厳しい治療と特殊なミルクや制限された食事を余儀なくされた子供達が居ります。そんな病気を持った子供達に接した時は胸が痛みますが、「今日の食事はおいしかった。」「又、作ってね。いつもありがとう。」「と言うメツセージと笑顔はどの子も可愛らしく、心が和みます。それにつけても、キレる、キレない等と世間を騒がす凶悪な事件を起す子供達には、普通に生きる事の幸せと命の大切さを感じて欲しいと思います。又健康に恵まれた体を当然と思いい、幸か不幸か欲求のままに飲み、そして食べ、生活習慣病に突入してしまつた大人達も数多くおられます。

「医食同源」とよく言われますが、せっかくな「食」に関して興味を示し、興味を持って勉強した私達は、健康で、心豊かに長生きしたいと思う今日この頃です。

何故、絵を描くか

国文学科 (大学十二回卒)

尾崎 裕子

静岡女子大学を卒業して早、二十年近くなろうとしている。改めて振り返ると本当に良い時代に、学生であったと思う。時はゆるやかに、ゆつたりと流れていた。社会人になって、世の中も変わったけれど三倍速以上のスピードで、時間は流れている。そして、生きている人間の質もかなりのスピードで低下してきている。日本人の感覚は、どうかしてしまつた。お金がすべてで利根的。世紀末という名のもと、本当に悲しい社会になってしまった。

数年前から、アクリル画を描きはじめた。水彩画なのだが油絵に近い描き方が出来るのが気に入る、そして「今の自分」をどうめたくて、自分の歴史を刻むため。自分を探すため。自分を励ますため。いろんな理由から描いている。私の絵をみてくれた人は、「明るく、元気が出る絵」と評する。「何故、そんなに明るい絵が描けるのか」と聞かれる。世の中に対する憤りを描く時、ストリートに表現する人と逆に、日常的な素材を明るく、強烈なアンチテーゼとして表現する人と二つのタイプがあるとすれば、私は後者だ。暗く、これからどうなるかわからない不透明な世の中だからこそ明るく鮮烈でいたい。学生時代のテニス、社会人となってからの仕事と、いろんな形で自分を表現してきた。そして、今、絵。

二十一世紀になって、さらに自分の絵を追及していくが、その絵には、そんな作者の思いがあるのを、どれだけの人が感じるだろうか。

総会報告

廣部先生の講演より

被服学科(短大五回卒)
海野洋美

昨年の総会で、私は司会進行役を務めており、先生の講演後に一言感想を述べることになっておりましたので、お話の内容を一字一句聞き逃すまいと身構えていました。内容は多岐にわたたり、ご自身の好奇心旺盛な少年時代を軸に、現在までの足跡をユーモアを交えながら熱く語られました。

先生の座右の銘のひとつは「人間万事塞翁馬」で「常に夢は大きく持て。しかし人生はほとんどその通りには行かぬ。だからといって悲嘆に暮れることはない」……事実先生も、プロ野球選手に始まり、発明家、建築家と挫折を味わいながら進路を変更されています。最終的に命を救ってくれた薬に出会い、薬学の道に進まれました。しかし先生は、その都度、こうなりたい目標に向かい最大の努力をされています。夢中で邁進しているうちに、他の道が開けたように思いました。

又、先生は、卒業生に、贈り物をされています。これが蓄って、大好評とか。聞きもらした方のために再度お知らせしましょう。それぞれの品に付けられたはなむけの言葉が薬学の研究以外にも多趣味で豊かな人生を歩まれている先生らしいと感じ入りました。

- ・エコーチェーン
- 「何処にあれ 呼べば応える友を持って」
- ・五円と一円を除く四種の硬貨を収納できるコインホルダー
- 「何事も100%完璧を期する事は難しい。無意味な1%を捨て、重要な九九%を目指せ」
- ・レーザーポインター
- 「目標は遠くとも、適確な指針を示せる指導者たれ！」
- ・手動式懐中電灯

「ひたすら努力せよ。努力を続ける限り栄光は常に君のものだ」

ご紹介は以上の四点でしたが、後に、他にも数種類の商品を用意されていることを知り驚きました。やはり廣部先生は偉い先生です。



平成11年度収支決算

自 平成11年4月1日
至 平成12年3月31日

収入の部		支出の部	
受取利息	325,579円	総会開催費	32,027円
通信費	100,000	会報発行費	490,322
雑収入	136,052	会費	15,830
		会議費	4,203
		事務費	15,439
		慶弔費	120,000
		銘石製作費	
本年度収入金	561,631	本年度支出金	677,821
前年度より繰越	13,949,002	次年度への繰越	13,832,812
合計	14,510,633	合計	14,510,633

(繰越金 内訳)

定額貯金	9,732,015円	書籍	138,000円
債券投信	3,521,538	テレホンカード	4,620
普通預金	15,302	振込残	3,000
通常預金	334,992	現金	83,345
		合計	13,832,812

上記のとおり相違ありません。
平成12年5月14日

会計監査 外岡幸子

平成12年度収支予算(案)

自 平成12年4月1日
至 平成13年3月31日

収入の部		支出の部	
本部会計より	1,000,000円	総会開催費	150,000円
		会報発行費	500,000
		会費	40,000
		会議費	10,000
		事務費	300,000
		予備費	
合計	1,000,000	合計	1,000,000

剣祭バザー収益金 27,330円

出品協力者

短大1回被服 竹澤好美
 短大5回被服 有志
 短大6回食物 鈴木とし子
 短大8回食物 望月紀子
 短大12回国文 原田溶子
 短大12回国文 村松通子
 短大15回食物 八木文子
 大学14回国文 望月嘉栄子

その他販売に協力してくださった方が15名程いました。

平成十二年十一月三日、恒例の剣祭が県立大学で行われました。今回も左記のように多数の方がご協力下さいました。心からお礼申し上げます。

訃報

元県立女子短大・大学教授
古沢一郎先生
吉田熙生先生
川端政一先生
秦 鴻四先生
が御逝去されました。
御冥福を心からお祈り申し上げます。

ありがき

今回も引き続き、テーマを『福祉(看護・介護)』に当って編集させていただきました。特に、初めて卒業生を世に送り出す県大看護学部は、昨年、一昨年から意気込みが今年にどのようにつながっているのか、どんな動きがあったのか、会員の興味を引くところではなかったでしょうか。そんなところに応えながら、すでに資格を取得して福祉面で活躍されている方のご苦労や、国会の場で庶民の声を代弁して下さっている同窓生を紹介させて頂きました。

このように適所で頑張っておられる仲間の姿は、私たちに強い励ましと勇気を与えてくださるものであり、いつまでも応援していきたいとだけおもうことでしょうか。

次号はまた違った角度からの編集も良いかと思えます。今後の参考にご意見・ご感想、ご希望などお寄せいただければ幸いです。

編集委員